

教皇パウロ六世

回勅「エクレジウム・スアム」抜萃

ECCLESIAM SUAM

1964年

「・・・省略」 私は、この内からの愛のうながしに、それは愛の贈り物として目に見える形をとるようになるものであるが、今日広くもちいられているようになって対話という名前を与えるであろう。

教会は自分が生きぬくために居を定めているこの世界と話し合うようにしなければならない。教会は全心全霊をこめて語る。教会は全心全霊をこめて告げる。教会は全心全霊をこめて話し合うのである。

教会の今日の生活がもつこの面はきわめて重要であり、すでに知られているように、公会議がこれをとくにとり上げ、ひろく検討することとなるであろう。そして、こうした検討を予定されている個々の問題を公会議の教父たちが自由に取扱ってゆけるように、私は問題をここで具体的にとり上げようとは思わない。私はただ、敬愛する兄弟たち、あなた方が、こうした検討を行うに先立って、考えてほしいと思ういくつかの点を示したいと思うだけである。その目的は教会に話し合いをするようにうながす動機を—そう明らかに、また話し合いにあたってとるべき方法、目ざすべき目的を—そう明らかにすることである。私が考えているのは、心構えをつくることであって、問題をとりあつかうことではない。

宗教—神と人間との対話

考えてほしい、敬愛する兄弟たち、対話は人間の力をこえたところに起源をもつのである。その起源は神の意向そのものの中に見出される。宗教はその本質そのものが、神と人間との一つの関係である。祈りはこうした関係を対話の形で表現する。啓示、すなわち神自身がイニシアティブをとって人類との間につくりたもうた自然をこえるつながりを、一つの対話として形づけることが出来る。そこでは神のみ言葉が託身のうちに、そしてその故に福音の内に自分を表現するのである。原罪のために中断された神と人間との間の、父と子の間の聖なる会話は、歴史の歩みの中にすばらしいかたちで再開された。救いの歴史は正に、この長いいろいろな対話を語る。それは神の側からはじまり、人間との間に、いろいろなすばらしい会話を織りなしていく。正にこの人々の間におけるキリストの会話のうちに、(参照バルク 3:38) 神は御自分について何かが、本質において全くただ一つしかないものであり、ペルソナにおいて三つである御自分の生命の秘密が、判るようにされるのである。そして最後にどのように御自分が知られることを望みたもうかを言われる。愛であるのが神である。そしてどのように私たちが敬い奉仕するのを望まれるかを言われる。愛が私たちの至上の掟である。対話は充実したものとなり、何をかくす必要もない。幼児はそこに招かれ、神秘家は、そこにすべてが言われているのを知るのである。

救いの対話のより高次の特徴

この言いあらわし難い、何にも増して現実である対話の関係は、父なる神がキリストを通じて聖霊の中に提供され定められたものであり、私たち、すなわち教会が、人類との間にどういう関係をつくり、育てていかなければならないかを理解するために、つねに考えなければならぬところである。

救いの対話は、神が自発的にイニシアティブをとりたもうたことによって始まった。「かの御者(神)がまず先に私たちを愛したもうた」(第一ヨハネ4:10)のである。この同じ対話を、求められるのを待つまでもなく、人々にまで拡げていくイニシアティブをとるのは、私たちのつとめであろう。

救いの対話は神の愛から、その大らかなあたたかい心から始まった。「神は、そのおん独り子を与えたもうたまでに、世を愛したもうた」(ヨハネ3:16)のである。利害をしらぬ燃え上る愛以外の何ものも、私たちの対話をうごかしてはならないであろう。

救いの対話は、これに招かれる人々の価値によって、また対話のいろいろな目的がすべて達せられるか否かによってすらも、そのあり方を変えはしなかった。「健康な人々は医者が必要としない」(ルカ5:31)私たちの対話もまた、限界なし、計算なしのものでなくてはならない。

救いの対話は、これをうけいれるように何人をも力づくで義務づけはしなかった。それは愛を求めるおどろくべき要求であった。この要求は、たとい人々を恐るべき責任の前に立たせたとし(参照マタイ11:21)、愛でこたえるか、これを拒むかをその自由に委ねたのである。数々のしるし(参照マタイ12:38以下)とこれをいかに考えるかは(マタイ13:13以下)見る人々の心構え、その心の求めているところに応ずるものとされた。それはこの人々が神の啓示を自分で決断して受けいれるのを容易にするためであった。しかし同時に、だからといってその決断の価値を失わないためであった。こうして私たちの使命もまた、たとえ議論の余地のない真理と、人間が必要とする救いを告げるものであるとしても、外からの強制を武器として現われることはないであろう。それはただ礼儀に充ちた態度、内にたたえた深い確信、普通の会話という誰にも許された道で、常に個人の自由、公民としての自由を尊重しつつ、救いという自分の贈物を差し出すであろう。

救いの対話はすべての人にとって可能となったのであった。この対話は何の差別なしにすべての人を対象としている(参照1コリント3:11)。私たちの対話も同様に普遍的なものでなくてはならない。それが、カトリック的ということであり、人が頭からはねつけない限り、あるいは心とは裏腹に、さも受けいれるような態度をとる場合をのぞいて、誰とでも行われるものでなくてはならない。

救いの対話は、ふつう段階的に進むということ、時間を追って展開するという、完全な成功に至る前につつましくはじめるということ、しばしば経験によって知ったのであった(参照マタイ13:31)。私たちの対話もまた、心理的、また歴史的成熟は徐々に行われること、また神が対話を効果あらしめる時を待つということに留意するであろう。しかしだからといって、今日しることを明日にまわすことはないであろう。私たちの対話は適当な機会をつねに求め、時の貴重なことを感じていなくてはならない。(参照エフェソ5:16)。今日、すなわち、来る日も来る日も、ふたたび始めなくてはならない。そして、私たちから、対話しようという相手より先に、始めなくてはならない。

話し合いは、だから使途として使命を果たしていく一つのやり方である。心を通わせる一つの方法である。その特徴は次のとおりである。

1. まず第一に明快である事。話し合いは理解しうるということをも前提とし、また要求している。それは一方にある考えを他方に渡すことである。人間の持つ、より高次の機能を使うようにという呼びかけである。このことだけで話し合いを人間の活動と文化がもたらす最高の現象の一つに数える十分な理由となるであろう。そしてこの最初にくる要請は私たちの使う言葉を再検討するようにと、わかりやすいものであるかどうか、だれもが知

っている言葉であるか、考えて選んだかと、福音を伝えるものの配慮を促すのに十分なのである。

2. もう一つの特徴は続いて柔和であることである。キリストが御自分にならうよう私たちに言われたあの特徴を持つことである。「穏やかで、心は謙遜な私から学ぶがよい」(マタイ 11:29)。話し合いは誇りに昂ぶることではない。棘(とげ)のある言葉を使うこと、相手の感情を害することではない。話し合いで一方の言葉が権威を持つのは、内的な理由とどうか、いわば自然とそうなるのであって、言っていることが真理であり、言葉に愛があふれており、模範を示すところから来るのである。命じる態度をとることではなく、押し付けることでもない。話し合いは平和に行われるものである。烈しい態度を避ける。忍耐深く広い度量で行われるのである。
3. 信頼を持つこと、自分の言葉が持つ力にもまた、相手がこれをどう受け入れるかにも信頼を持つことである。信頼は心を開かせ友情を深める。信頼を持つ時、話し合う人々はあらゆる利己的な態度を除くことが一つのこの上ない善である事を互いに認めるようになり、こうしてその心は結び合わされるのである。

話し合ううちに、信仰の光に導く道がいかにさまざまであるか、そしてこれをどうすれば同じ目標に収斂(しゅうれん)させることが出来るかが明らかとなる。こうした道のいろいろは互いに食い違っているかも知れないが、互いに補い合うものとなることが出来るのである。私たちが普通使っている論理と言葉を役に立たなくさせ、もっと深く追求するように、そして表現を新たにするように義務づけるのである。これは思索と忍耐を要求するものであるが、その弁証法的な過程は、真理のいろいろな要素を、自分以外のいろいろな意見の中にも発見させることとなるであろう。それは、私たちが教える点をきわめて正確に表現するよう私たちに義務づけるであろう。そして相手が反対し、なかなか理解しようとしないうことを考えにいられて、これを示そうと努力したという点で、私たちが神によみせられるものとするであろう。私たちが知者とし、私たちに真に教えるものとするであろう。

ところで、話し合いで説明する場合どういう形でするのである。

おお、救いの話し合いには、さまざまな形がある。話し合いは実際に試みて何が必要かを知りこれに適応していくのである。適当と思われる方法をえらび、意味のない経験ぬきの筋書にとらわれず、表現がもう内容をつたえる力、人々を動かす力を失ったときには、これにいつまでも固執しない。

ここから一つの大きな問題が生まれる。それは、特定の時代、特定の場所、特定の文化、特定の社会環境の中にある人々との生活に、教会の活動を密着させるという問題である。

教会は、活動を展開するのは、具体的な一定の歴史的、地域的な環境の中においてであるが、こうした環境にどこまで自分を同一化しなければならないのであろうか。教会は自分の教義とモラルに忠実でなければならないが、こうした忠実さを蝕む一種の相対主義の危険から どういう風に自分を予め守らなければならないのであろうか。どうすれば使徒の模範に従って、すべての人を救うために、すべての人に近づく事の出来る自分になるのであろうか。「私はすべての人を救うために、すべての人に対してすべてとなった」(1コリント 9:22)。世界は外からは救われない。人となりたもうた神のみ言葉のように、ある意味で、自分がキリストの言葉を伝えようとする人々の生活に自分を同化する必要がある。種々の特権を云々して距離をつくることなく、あるいは意味の通じない言葉の煙幕をはることなく、もし人が耳を傾け理解することを望むのなら、人間らしいものであり、モラルからみてもとりうるものである限り、一般の生活態度、とくにもっともつつましい人々のそれを、自分もまたとる必要がある。自分が話す前に、まず声に、それどころか人間の心に、耳を傾ける必要がある。これを理解し、可能なかぎりにおいて尊重し、従

える場合には、従う必要がある。わたしたちが人々を導き、その父となり、師となりたいと思うこと自体の故に、人々の兄弟となる必要がある。話し合いの雰囲気は友情である。それどころか奉仕である。私たちは、このすべてを思いおこし、そしてキリストが私たちに残したもうた模範と掟に従って、これを実行するように努力しなければならないであろう（参照 ヨハネ 13:14 - 17）。

しかし危険は残っている。使徒として働くことは危険な仕事なのである。兄弟たちに近づきたいと心をくだくことが、真理の厳しさを弱め、真理を縮めることになってはならない。私たちの話し合いが、私たちの信仰への精進を前にした一つの弱さであってはならない。使徒として働くことが、私たちの信仰を特長づけねばならない思考と行動の諸原則に関して、あいまいな妥協に終わることがあってはならない。迎合主義と折衷主義は本質的にいて私たちが説こうと望む神の言葉の力と内容に対する一種の懐疑主義なのである。

キリストの教えに欠けることなく忠実なもののみが、使徒として効果的に働くことができる。そしてキリスト教的召命を生きる人のみが、自分の接触する誤謬から感染しないですむことができるのである。

(東門に郎訳、中央出版社発行、1967年。)